

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

中信高校安全登山研究会「登山技術研修交流会」に参加しよう

	日時	場所	内容	備考
10月28日 金	18:00	白馬高校合宿所	信高山岳会 崑崙山脈アクサイ山群主峰ヤズィックアグル峰 (6770m) 初登頂の報告	講師：池田工業高校教諭 大西浩氏
	19:00	同上	活動交流・懇親・夕食	山岳部の活動についての意見交換と顧問間の交流
	21:00	同上	就寝	
10月29日 土	6:30	同上	起床 朝食 清掃	
	8:00	白馬乗鞍スキー場～樽池 天狗原	実習 8:00 白馬高校合宿所出発 ・ 樽池 (天狗原) 登山 ・ ザイルワーク ・ 読図	講師：大町北高校教諭 小林國弘氏 25000 分の一地形図では「白馬岳」
	15:00		終了・解散	

例年行なっている研修交流会。金曜日、授業が終わったらみんな集合。夜は、不肖私にヤズィックアグルの登山報告をします。そのあとは、顧問はもちろん生徒、中信地区以外の人、非顧問で山の愛好者まで、みんなで交流しながら、高校山岳部を盛り上げられる方途を探りましょう。翌日は、白馬乗鞍スキー場から乗鞍岳に登りながら、読図やザイルワークを学びながら、技術を研修しましょう。申し込みは大町北高西牧Tまで。

ヤズィックアグルの蒼い空 11 C1建設なる

7月29日。朝6:00にヌルさんと交信。ちらし寿司を食べたあと、出発準備にかかる。昨日の夕方は頭が割れるように痛かったが、幸い朝になったら治まっている。昨日までで共同装備と食糧の荷上げは概ね完了しているので、今日は個人装備の荷上げである。昨日に比べて荷物は軽い。8:00に出発し、9:00には広河原に到着した。荷物の軽さを割り引いても、隊全体が大分速いスピードで動けるようになってきた。隊員5人が順調に順応してきている証拠である。9:50氷河への取り付け点。とんでもなく堅い氷ではあるが、日射により毎日、毎日氷河の形は変わり、ロープを固定してあるアイススクリーも緩んでいるので、確認しながら慎重に進む。

氷河上はおよそ1時間の登り、途中休憩を入れるには短い、続けて登るには少々長い。順応してきているとは言ってもさすがに御年61歳の隊長には厳しかったようで、途中で泣きがはあった。慌てることもあるまいと、C1直前で1本入れて呼吸を整える。平地のほぼ半分の気圧、やはり空気は薄いのだ。11:15にはC1に到着。全隊員の到着を待って、C1テントを設営する。長大なヤズィックアグル南氷河の堅い氷をピッケルで砕き、整地するという作業の末に、頂上を望む最高のロケーションに二張りのテントが張られた。今日は朝から頂上が見えたり隠れたりした天気であったが、下山するころから雪が舞い始めた。昨日今日とやや天候が不安定であるが、日本から支援してくれる気象庁の西島さん(山仲間としてボランティアで僕らのために高層天気図の解析をして3回ほどメールで送ってくれた)の予報通りである。この状況の中で、行動の制約も受け

ず、順調に上部へキャンプが延びていったことは、大きな収穫である。

夜、信毎の衛星携帯を借りて留守本部へ連絡を取る。山内君が体調も回復し 28 日にはカシュガルに無事到着、明日ウルムチ入り、3 日には日本へ帰るという日程が確定したと聞き、ほっと一安心した。あれがベストの選択だったのか、未だに僕の中ではもやもやしたものが残っているが、仕方ない。無事に帰ったことを良しとしよう。

待望の休養日

7 月 30 日、待望の全員休養日である。BC のヌルさんには、昨日のうちに朝 6:00 の定時交信はパスする旨を伝えておいたので、7:30 ころまでシュラフの中でうつらうつらしていた。終日まったりとした生活。昨晚は、頭痛は少し治まったが、のどがいがらっぽいのに加え、消化機能が弱っているためだろうか、腹が張ってゆっくり眠れなかった。やはり身体は相当くたびれている。氷河の水は漬けておくとちぎれてしまいそうなくらい冷たいが、せっかくの休養日。文字通りスッポンポンになって水浴をした。そのまま着たきり雀だった服を上から下まですべて洗濯。朝方の氷河の水は澄んでいるとはいえ、泥混じりである。そんな水であっても、これはこれでスッキリ。

昼食は、大分気が早い登頂の前祝いと称して、赤飯を炊く。これが極めて美味。かつての α 米はにおいもあって山でしか食べられなかった(山だから仕方なく食べていた)が、技術は進んでいるのだ。午後は小生の自信作たる垂直炉で溜まったゴミを焼く。緊急時用の O_2 を噴射すると一気に火勢が強まった。当たり前と言えば当たり前なのだが、ここはやはり酸素が薄いのだ。

寒天パパのゼリーを 5 人でつつきながら、C1 から先のルートについて意見を交わす。昨日までの荷上げを経験する中で、僕自身は現段階ではかなり楽観的な見方ができるようになってはいたが、だからといって安心はできない。しかし、ディスカッションする中で感じたのは、それぞれの隊員が意識を高く持ち、モチベーションを高めてきていることだ。このままの気持ちを持続させて、5 人全員登頂へとつなげたいと思った。

佐藤君が明後日のグラフの写真のために ABC で談笑している隊員の写真を撮りたいと言う。どうもこれは本社のデスクの意向らしいが、今このときの写真が遙か彼方の日本に送られて、翌日の紙面には載る。かつてのヒマラヤ登山隊には「メールランナー」が同行し、麓と BC を手紙をもって往復したものだが、技術革新は目覚ましい。僕は、93 年のアリューション、2000 年のカシタシといずれも信毎記者が同行取材してくれるという経験をしてきたが、写真を送るのに前 2 隊の記者がどれだけ苦労していたか見てきた。今回は通信速度自体は比較にならないくらい速くなったが、それはそれで仕事量が増えるということでもある。特に今回の佐藤君は学生時代の山経験を買われての抜擢であり、記者である以前に登頂隊員でもあるだけに、一層大変である。登山隊員としての仕事を同等にこなした後、他の隊員が寝静まったあと、高所で顔や手をぱんぱんにむくませながら、記事を PC に打ち込み、送っている姿を何度も見た。ところで、その PC だが、今回はすべてソーラー充電でまかなった。これが有効で、衛生電話や PC はもちろん、ビデオや個人のカメラのバッテリーも含めすべて問題なく対応できた。

こうして、一日ゆっくりできたゆとりからだろうか、夕食の後はみんなでだみ声を張り上げて、山の歌を歌った。松田さんが歌集を持ってきていたのだが、山で歌を歌うという文化も、最近途絶えがち。若い隊員たちにも是非傳承してほしいと思った。

